

## 「生活時間」を教材としたESDの実践

### Analysis of ESD Practice Using Time Use Data as Teaching Materials

小野 恭子\*・中山 節子\*\*・伊藤 葉子\*\*・西原 直枝\*\*\*

Kyoko ONO\*・Setuko NAKAYAMA\*\*・Yoko ITO\*\*・Naoe NISHIHARA\*\*\*

#### 要旨

これまでの日本におけるESD実践は家庭科に限らず環境をテーマにする教育実践が多い傾向にあり、家庭科では男女共同参画社会やワークライフバランスなど社会的・経済的側面に関するテーマを据えて実践することが課題である。生活時間は、生活時間データを読み解く過程で、家事労働時間の分担や長時間労働などの生活問題に気づく教材であり、男女共同参画社会を推進する家庭科として有効な学習材である。本研究では、ESDの視点で「生活時間」を教材とした授業実践を行い、その効果を明らかにすることを目的とした。児童は、「将来の自分の生活について」を中学生などの自分の近い将来で捉える視点と、大人になった時の生活を想像する二つの視点で捉えた。大人の生活時間を取り上げたことによりジェンダーによる生活の違いをとらえ、その理由について社会的背景も含めて考えさせることができた。また、ESD実践としての生活時間学習として展開することにより、児童が、自分がどのような暮らしをしたいかを考えると、どのような社会を築いていきたいのかを考えることにつながる事が明らかとなった。

キーワード：ESD 小学校家庭科 生活時間

#### 1：研究の背景と目的

2006年から世界各国でEducation for Sustainable Development (以下ESDと称す)の取り組みが行われている。日本はESDの10年の実施を提唱し、ESDの取り組みを推進し、リードする役割を担ってきた。2014年に「国連ESDの10年」は最終年を迎え、これまでの成果と課題を検証し、新たなステージに向けての取り組みがスタートしている。

学校教育においても今後のESD推進の方向性が検討され始めている。次期学習指導要領の動向を見ても、学校教育がより社会とのつながりの中で実践されることが重視され、教育課程企画特別部会の論点整理においては、身近な課題について自分ができることを考え行動していくという学びが地球規模の課題の解決の手がかりになるというESDの理念が述べられて

いる(文部科学省, 2015)。また、この論点整理では、家庭科は、家庭や社会のつながりを重視し、持続可能な社会づくりのための力の育成についてさらなる充実を図ることが盛り込まれている。したがって、今一度、家庭科における教育実践をESDの観点から分析し捉え直す作業が必要であろう。

現行の学習指導要領では、小学校家庭科において「D 身近な消費生活と環境」が設定され「持続可能な社会の構築など社会の変化に対応して主体的に生きる消費者としての態度を育成」が目指されており、家庭科におけるESD視点が含まれる実践は、尾島(2004)、綿引(2004)らの実践に見られるように、環境をテーマとしたものが多い。伊藤・中山(2014)が指摘するように、日本におけるESD実践は、家庭科に限らず、環境をテーマとする教育実践が多い傾向がある。しかし持続可能な社会の実現には、環境という観点のみな

---

\* 弘前大学教育学部  
Faculty of Education Hirosaki University  
\*\* 千葉大学教育学部  
Faculty of Education Ciba University  
\*\*\* 聖心女子大学  
University of the Sacred Heart

らず文化的側面、環境的側面、経済的側面、社会的側面など様々な側面から生活課題を捉えた実践が求められる。したがって、特に家庭科では男女共同参画社会やワークライフバランス、ディーセントワークなどの社会的経済的側面に関するテーマを据えてESD実践を行うことが課題であると言える。

本研究では「生活時間」教材を取り上げるが、この教材を家庭科ではどのように扱い、何を学びとしているのかについて述べておきたい。小学校において「時間」は、学校という組織の中で、管理された「時間」として、秩序を保つ際に特別な意味を持たされるキーワードとして表出する。そのために、小学校における「生活時間」の学習は、反射的に規範を学ぶ学習として、家庭生活や社会生活を営む上での問題を把握する学習へと結びつきにくいことが指摘されている（中山，2014）。また、現行の学習指導要領において、「生活時間」の学習は、5学年及び6学年「家庭」の「A家庭生活と家族」の中に「生活時間の有効な使い方を工夫し、家族に協力すること」としてある。学習指導要領において、生活時間の学習は、家庭生活を支え協力するため、家庭生活の大切さに気づくための一手法と位置づけられている。生活時間が規範的な生活改善の道具として用いられ、生活課題に目をむける学習に発展しにくいのは、学習指導要領の位置づけにも原因の一端があると言える。

このような小学校における「生活時間」学習の課題をふまえ、大竹（1998）は、生活時間調査の教材化においては、生活時間の記録から、個々の生活の反省を導くのではなく、生活に関する科学的な事実を導き、一般的な生活課題を見つけだせるように学習者に示すことが重要であると指摘している。中山ら（2006）、小野（2009；2010）はこの大竹の示す「生活時間」学習のポイントを軸にして実証的な授業実践研究を継続して行ってきた。これらの研究結果から明らかとなったのは、第一に、生活時間は、生活時間データを読み解く過程で、家事労働時間の分担や長時間労働などの生活問題に気づく教材であり、男女共同参画社会を推進する家庭科として有効な学習材であること、第二に小学生でも生活時間データからこれらの生活課題に気がつき、社会的課題と結びつけて発展的に考えることができることである。

これらの研究経緯をふまえ、本研究は、ESDの観点から「生活時間」を教材とした授業実践を試み、この授業の効果を明らかにすることを目的とする。また、従来の「生活時間」の学びとの差異について考察

を行う。

## 2：研究の方法

研究の方法は、第1に授業前後において10項目における5択法による質問紙調査と「サステナビリティ」についての自由記述を実施し、量的調査及び質的調査よりどのような項目に成果があったのかを検証することとした。この質問紙は、伊藤ら（2012；2014）が開発した指標をもとに、小学校高学年の児童が理解し、かつ本研究で扱う学習内容を加味し、作成したものである。第2に授業実践時における児童のワークシート及び授業中の発言を分析し、ESDとの関連について検証した。

## 3：授業実践の概要

研究対象とした授業実践対象者は東京都内国立大学附属小学校6年生33名であり、授業実践時期は2015年2月～3月、授業時間数は全4時間で家庭科の学習として行った。授業の略案を、以下の表1に示す。第1次は2時間かけ、事前に記録しておいた自分の生活時間調査用紙を用いて、自分の生活を振り返ることを目的とした。第2次も2時間をかけ、親の生活時間調査用紙から親の生活の特徴を把握し、自分自身の生活と比較し、違いの理由を考え、将来の自分の生活を考えることを目的とした。

表1 実践授業指導略案

時間	主課題	主な学習活動
第1次 (2時間)	「自分の生活を振り返る」	1, 事前に記録しておいた自分の生活時間調査用紙から、行動を5つのグループに分類する。 2, 文類した行動毎に平日・休日の時間を集計し、生活の特徴をつかむ。 3, グループ内で男女の生活を比較し、その特徴をつかみ、その理由を考える。
第2次 (2時間)	「親の生活を見つめ、その理由と自分の将来を考える」	1, 第1次で作成した行動分類を使って、親の生活時間調査用紙を集計し、その特徴をつかむ。 2, 親の生活の特徴と自分たちの生活の特徴を比較し、その理由を考える。 3, これからの生活を予想し、自分たちがどのように生活をしたかについて考える。

#### 4：授業づくりのポイント

ESDの対象となる課題は多岐にわたるものであるが、この中でも人権やジェンダーの課題に焦点をあて、持続可能な社会について考えさせるための授業構成を検討した。生活時間データを教材にする際には、生活時間の計算や表の作表に多くの時間がかかるため(中山, 2014)、本実践においては、この課題を改善し、生活時間のデータを読み取り、議論をする時間を十分に確保するための工夫を行った。

##### (1) 授業構成の工夫

ジェンダー課題に着目させるために以下三つの方針を立て、授業構成を行った。

一つは、自分と家族の生活を10分ごとに帯グラフに書き出し、生活を振り返る内容とした。二つは性別や年齢による生活の特徴を捉えその理由を考えるように授業の流れを工夫した。三つは将来の自分の生活を予想し、どのような生活を行いたいのかについて考え、意見を交換することとした。

##### (2) 教材の工夫

授業で使用する生活時間調査記録用紙は、児童自身と児童の保護者に平日と休日(学校の無い日)の2日分の生活を、1日が終わった後に思い出して10分毎に行動を記述してもらったものである。この記述内容をもとにして、児童がグループで話し合いながら行動を分類する。小野のこれまでの授業実践(2009; 2010)において、この調査記録用紙を用いた方法では、データの集計に時間がかかり、話し合いの時間が取れないため、小学生が容易に短時間で行うことができる生活時間の行動分類やデータの集計の方法の開発が課題とされていた。そこで、時間を長さで実感できるように1時間を3センチメートル、10分を0.5センチメートルに調整し、調査用紙にロール付箋紙を張り、その上に生活の記録を行うことで、行動ごとに切れ目を入れ、短時間で生活時間調査結果の集計が可能となるように工夫を行った。

#### 5：授業前後の質問紙調査及び記述内容から見る授業の学び

##### (1) 質問紙調査(量的分析)からわかる学び

アンケートは質問した10項目についてそれぞれ「当てはまらない」を1点、「やや当てはまらない」を2

点、「どちらでもない」を3点、「やや当てはまる」を4点、「当てはまる」を5点とし、点数化し前後の平均値について対応のあるt検定を行った。アンケートの質問項目は、小学校高学年の児童が理解でき、本実践授業の内容の理解度を測れるよう設定したものである。

表2 持続可能性に関する項目の意識

あてはまるか	授業前	授業後	t 検定
日頃から環境に与える影響を考へて生活を工夫している。	3.88	3.94	n.s.
水やエネルギーなどの資源を大切にするように生活を工夫している。	4.03	4.18	n.s.
自分と異なる意見や考えに耳を傾けることは重要だと思う。	4.42	4.58	n.s.
他の人の助けになるようなことをすることは自分にとって重要である。	4.33	4.64	n.s.
自分ができることで他の人に役に立つことをするのがコミュニティ(地域)をよくすることを知っている。	4.12	3.88	n.s.
サステナビリティについて知っている。	1.42	1.79	n.s.
性別によって行動や行動にかかる時間が異なることを知っている。	3.53	4.50	***
性別によって行動や行動にかかる時間が異なることを解消するための方法を知っている。	2.37	3.56	***
性別によって起こる不平等なことや不公平なことを解消するための工夫をすることができる。	2.97	3.67	**
性別によって起こる不平等なことや不公平なことを解消することはサステナビリティに役に立つと思う。	2.19	2.50	n.s.

\*: p<0.05 \*\* : p<0.01 \*\*\* : p<0.001 n.s. : 有意差なし  
5当てはまる 4やや当てはまる 3どちらでもない  
2やや当てはまらない 1当てはまらない

表2に示すように、「性別によって行動や行動にかかる時間が異なることを知っている」、「性別によって行動や行動にかかる時間が異なることを解消するための方法を知っている」及び「性別によって起こる不平等なことや不公平なことを解消するための工夫をすることができる」の項目では授業前より授業後の方が、

有意に評価が高かった。

この結果から、「ジェンダー」の内容について学ぶことができていることが明らかになった。しかし、授業の最終目的であった持続可能な社会に関する項目では授業前後において有意差は見られず、学びが十分でなかったと言える。

## (2) 「サステナビリティ」についての自由記述（質的分析）からわかる学び

「サステナビリティとはどのようなことだと思いますか」に対する自由記述による回答を授業前後で比較した。授業前の回答を表3に、授業後の回答を表4に示す。

授業前の記述では「持続可能なこと」と記述した児童が1名いたが、「わからない」「難しくわかりません」と答えた児童が30名、未記入の児童が2名とサステナビリティについての知識やイメージがないと言える。

表3 授業前「サステナビリティとは」に対する記述

カテゴリー	記述例	記述数
持続可能性	持続可能なこと。	1
わからない	わからない。 難しくわかりません。	30
未記入		2
合計		33

一方で、授業後の記述を見ると「世の中の良いことを続けていくこと」といった良い事柄の持続についての記述が11記述、「仕事と生活のバランスがしっか

表4 授業後「サステナビリティとは」に対する記述

カテゴリー	記述例	記述数
良い事柄の持続	世の中の良いことを続けていくこと。 よいことを続ける可能性。	11
ワークライフバランス	仕事と生活のバランスがしっかりと取れていること。 仕事と家での生活（家族とのコミュニケーションなど）のバランスを崩さないようにする持続する可能性。	5
ジェンダー	性別や地位の違いによって不公平な扱いをされないようにすること。	4
共存	すべての人が共存できる可能性。	3
その他	仕事などが続く可能性。 風習の持続性。	10
合計		33

りとれていること」「仕事と家での生活（家族とのコミュニケーションなど）のバランスを崩さないように持続する可能性のこと」といったワークライフバランスに関する記述が5記述、「性別や地位の違いによって不平等な扱いをされないようにすること」といったジェンダーについての記述が4記述、「すべての人が共存できる可能性」といった共存についての記述が3記述、その他の記述が11記述となっており、未記入の児童はいなかった。

「サステナビリティ」という抽象度の高い言葉に対して、小学生にとって自由に記述することは容易なことではないと思われたが、持続性やワークライフバランス、ジェンダー、共存などのサステナビリティの一部について考え自分なりの答えを見出すことができたと言える。

## 6：授業実践における結果

### (1) 児童自身の生活についてワークシートから見る児童の学び

授業実践のワークシート記述から児童がどのようなことを学んでいたのかについて分析した。

教師は、児童に自分たちの生活行動を五つの分類に分けるように目安を示したが、学級全体の話し合いの結果、睡眠・食事・入浴などの「習慣」、勉強や習い事などの「習い事」、テレビや漫画など「趣味」、親戚の訪問など「特別なこと」の四つに分類した。

その後、自分の生活行動の分類を行い、自分の一日の生活がどのような行動にどのくらいの時間をかけているのか、また平日と休日の違い、性別による違いなどの確認をおこなった。第1次の授業実践後に児童が記述した学習感想を分類すると四つにまとめられた(表5)。

「中学生になると部活や定期テストで忙しくなるけどなるべく早寝早起きをしたい」や「学ぶこと、体を動かすこと、リラックスすることをバランスよく暮らせるといいと思っています。」といった生活リズムに関する記述が23記述、「女の子にはない男の子の良い特徴を取り入れたい。」「男子と女子では、だいぶ生活の感じが違ってくると思ったので、将来は男子と女子でトラブルがあるなと思った。お互いにちゃんとわかって生活することが大切なんだと思いました。」といったジェンダーについての記述が4記述、「自分の生活は将来何をしているかでも決まると思うので、わからないけど自分がどのように生活をしているのかと

表5 第1次終了後の児童の学習感想

カテゴリー	記述例	記述数
生活リズム	中学生になると部活や定期テストで忙しくなるけどなるべく早寝早起きが続けたい。 学ぶこと、体を動かすこと、リラックスすることをバランスよく暮らせるといいと思っています。	23
ジェンダー	女の子にはない男の子の良い特徴を取り入れたい。 男子と女子では、だいぶ生活の感じが違ってくるとわかったので、将来は男子と女子でトラブルがあるなどと思った。お互いにちゃんとわかって生活することが大切なんだと思いました。	4
自分の生活の特徴	自分の生活は将来何をしているかでも決まらと思うので、わからないけど自分がどのように生活しているのかと振り返るのはすごいいいと思いました。	3
その他	無駄だと思うことは省く。	3
合計		33

振り返るのはすごいいいと思いました。」という自分の生活の特徴についての記述が3記述、その他の記述が3記述あった。

多くの児童は第1次のねらいであった自分自身の生活を振り返り、気づいたことを学習感想として書いているものの、グループ内で比較した男女の違いやその理由について書いているもの、さらに生活を振り返ることについて書いているものが見られたことが、第1次における成果と見ることができる。

さらに、生活リズムについての記述では、「中学生になると(略)」といった記述も見られている。この授業の実践時期は、6年生の2月であり、卒業を控えている児童が、小学生から中学生へと生活の変化がある時期である。新しい生活への期待と不安を抱える中で、自分自身の生活を生活時間データにより客観的に見つめることにより、これからの新生活への自分の生活の改善点を具体的に考えることができたと思われる。

## (2) 児童の性差による生活や行動の違いをどう捉えているか

授業の中で男子と女子の生活の違いについてグループ内で比較させたのちに、気づいたことを発表させる場面における教師と児童のやりとりから(図1)、性

差が出ている理由について考えている事柄を探った。

教師が、男女で差があることについて児童に問うと、児童から「好みの違い」という回答が出された。これに対して教師がさらに「どういう意味で?」と説明を求めると「男子は行動的で女子は静かな……。」と答えている。さらに「親の育て方が違う」という考えも出され、児童自身が普段感じている男女の違いについて、発言している様子がうかがえる。

T: どうして男女で差があるんだろう。  
C1: 好みの違い。  
T: 好みが違う。どういう意味で。  
C2: 男子は行動的で女子は静かな……。  
T: それは学校生活の休み時間でもそう?  
C3: ボランティアとか。  
T: 何?  
C4: 親の育て方。  
T: そういうふうに言われてる?  
C5: 男子はもう遊んできていいよみたいな。  
(中略)  
T: 低学年の頃はみんなでドッジボールしていたよね。  
C6: 疲れるんだもん。  
C7: 女の子は周りで遊んでいる子がいないから外に出にくい。

図1 男女の差について考えている場面のプロトコル  
(Tは教師を、Cは児童を指す)

またその理由として、親などの影響を受けているのではないかと推測している。さらに「女の子が周りで遊んでいる子がいないから外に出にくい。」といった周囲の様子をうかがいながら行動していたりする現状が明らかになった。これらのやり取りから教師が性差について考えるように投げかけたことにより、性別による行動の違いやその理由について注目し、普段の行動から違いの理由を考えることができたと言える。

## (3) 児童と保護者との生活の違いについて

授業の第2次では、児童が考え、児童自身の生活行動を分類した「習慣」・「習い事」・「趣味」・「特別なこと」の四つの生活行動分類に沿って、保護者の生活時間調査を分類し、それぞれの行動にかけている時間を算出した。さらに、男性の生活の特徴、女性の生活の特徴、児童自身の生活との比較を行った。その過程において男性の生活の特徴及び女性の生活の特徴についてワークシートに記述したものを表6、表7に示した。

男性の生活特徴については、「休日は子どもと遊ん

だりと、遊びの時間が長い。」といった余暇についての記述が12記述、「勤務時間がとても長い（平日）」といった長時間労働についての記述が9記述、「家事をやらない」といった家事についての記述が8記述、その他が3記述あった。

表6 成人男性の特徴

カテゴリー	記述例	記述数
余暇について	休日は子どもと遊んだり遊びの時間が長い。 遊びが女性に比べて少ない。	12
長時間労働	勤務時間がとても長い（平日）。 仕事をしている時間が長い。	9
家事	家事をやらない。 女性に比べて人にしてもらえる家事や買い物の時間が短く、習慣が多い。	8
その他	人にしてもらえることと習い事と特別なことが何もない。	3

表7 成人女性の特徴

カテゴリー	記述例	記述数
家事	家事の時間が長い。家事が多いからあまり遊ぶ時間がない。	22
余暇について	男性の方は遊ぶことはないけど、女性の方はテレビを見ている時間が長い。 習い事は女性の人しかやらない。	6
その他	とにかく風呂が長い。 あまり仕事をしていない。	4

一方で、女性の生活特徴については「家事の時間が長い。」「家事が多いからあまり遊ぶ時間がない。」と言った家事に関する記述が最も多く22記述、「男性の方は遊ぶことはないけど、女性の方はテレビを見ている時間が長い。」「習い事は女性の人しかやらない。」と言った余暇に関する記述は6記述、その他の記述が4記述であった。

これらの記述からは男性の生活特徴では余暇の時間についての記述が最も多く、さらに、長時間労働をしている勤務体制にも気づいていることがわかる。女性の生活特徴については、家事についての記述が最も多く、女性は家事をするものといった家庭内性別役割分業について言及している記述が多く見られた。

#### (4) 成人男女の性差による生活や行動の違いをどう捉えているか

男性と女性の違いとその理由についての記述を表8にまとめた。

最も多かった記述はジェンダーに関するもので22記述あった。「昔から男性は仕事、女性は家事という意識があるから男性の方が体力があり、仕事にあっている。働く場は女性よりも男性の方が優位な立場にいるために女性が働きにくい。家の中では分担しなければ物事が進まない。」といった記述では、ジェンダーバイアスが定着してしまっていることや体力の差、さらに働く場としての状況がどのようになっているかということを考えていることがわかる。

表8 児童が捉えた成人男女の生活の違いとその理由

カテゴリー	記述例	記述数
ジェンダー	昔から男性は仕事、女性は家事という意識があるから男性の方が体力があり、仕事にあっている。働く場は女性よりも男性の方が優位な立場にいるために女性が働きにくい。家の中では分担しなければ物事が進まない。 親は僕達よりも昔に生まれたため、今は女性が仕事をするのが珍しくないことだが昔は、女性が家事が中心だったためにその風習が今も残っていて、「男は仕事、女は家事」っていうのに縛られてしまっている。	13
仕事の有無	お母さんは仕事をしていないからその分人にしてもらえる行動をしている。	5
体力の違い	男性の方が女性より体力があるから仕事をやる時間が結構違うと思いました。	5
その他	男性・女性のそれぞれに得意なことがあり、それぞれが家庭の必要な仕事家事を分担していくと効率が良いから。 その家庭によって子供がいてまだその子が小さかったらどちらかが見られるけど、大きい子もいて他の子の面倒も見れたら（終わったら）親二人とも仕事をする。	9

さらに「親は僕達よりも昔に生まれたため、今は女性が仕事をするのが珍しくないことだが昔は女性は家事が中心だったためにその風習が今も残っていて、「男は仕事、女は家事」っていうのに縛られてしまっ

ている。」という意見からは、児童達の意識では、男性は仕事、女性は家事というものは古い・昔のことと考えており、さらに女性の社会進出が進んでいるにもかかわらず、ジェンダーバイアスに囚われてしまっているのではないかと考えている様子が見えてくる。

また「お母さんは仕事をしていないからその分人にしてもらえる行動をしている」といった意見から、母親が家事や家族のために行っている事柄が多い理由を収入労働と結びつけていることがわかる。またこれらの家庭内性別役割分業は、男女における性別による体力の違いによると考えている児童もいることが明らかになり、「男性は仕事・女性は家事」ということは、おかしいと思いつつもその理由については、様々な観点から考えていることが明らかとなった。

### (5) 将来の生活についての考察

単元の最後に、「将来よりよい生活を送るために考

表9 将来よりよい生活を送るために考えたことに対する記述

カテゴリー	記述例	記述数
ワークライフバランス	将来仕事ばかりやるのは体にも良くないから家で家事をやったり、家族と話したりすることを大切に、息抜きをすると思いました。 仕事ばかりしていると家族との時間が減ってしまったり夫と行き違ってしまうなどのことがあると思うので、(中略) 休日は自分の趣味の時間や家族との時間にするのが良いと思いました。	14
家事分担	男の人も自分から家事をやって女の人を助けていくほうが良いと思うし、女の人でも仕事をやりたければやってバランスを取れば良いと思います。	8
ジェンダー	女性は家事、男性は仕事みたいな風習が残っていますが、男性と女性、お互いの意思を尊重してやりたいことをやるというような考えが社会に広まっています。(中略) 女性の意思も尊重できるよう家事の担当など変えていきたい。	6
男女共同参画	今は女性が社会に進出している時代だから、昔の風習では今の時代に合っていないため今の風習を変えたほうが良いと思う。	4
その他	保育園や幼稚園などを増やして働きたい女性は自由に働ける社会にしたほうが良いと思います。	14

えたこと」について記述したことについて表9にまとめた。

表9からも分かるように、記述はワークライフバランスに関するものが最も多く14記述、次いで家事分担に関する記述が6、ジェンダーに関する記述が4、男女共同参画に関する記述が4、その他14となった。

ワークライフバランスについては、教材として用いた大人、特に男性の労働時間が長いことがきっかけとなり、「仕事ばかりしていると家族との時間が減ってしまったり(略)」などと家庭での生活が減ることに気づき、自分の将来はバランスをとった生活をしたいと考えていることが分かる。また家事分担についても、児童の生活時間を扱った時には、出てこなかった気づきであるが、大人の女性の生活特徴をとらえたことによって、男性との性差が明確になった結果、考察できたことであると考えられる。

これは家事分担だけでなくとどまらず、ジェンダーについて男女で協力して生きるためにはどのようにすればよいかという男女共同参画社会につながる気付きにも発展しており、自分たちが望む社会を作るためにできることを考えていることがうかがえる。さらに発展的な意見としては、仕事をしたいと望む女性が働きやすいように、保育園や幼稚園の整備といった社会的制度にまで考えが及んだ意見も出された。

## 7：考察

この実践において、児童は、「将来の自分の生活について」を二つの視点から捉えることができた。すなわち、「将来」を中学生などの自分の近い将来で捉える視点と、大人になった時の生活を想像する視点であった。

中学生では、勉強や部活が忙しくなり生活の変化があると考えており、このように生活が大きく変わるタイミングに自分の生活を生活時間データにより客観的に振り返り、家族との関わりも考えながら生活習慣の見直しなどについて考えられたことは成果があったといえる。そして、自分の生活時間だけでなく大人の生活時間を見ることで、大人になった時の自分の生活についての考察を深めていることが明らかとなった。とりわけ、授業においては、男女による違いに焦点を当てたことで、時間配分(生活のバランス)やジェンダーについての議論を深めることができた。

小学校家庭科の教科書には、自分(子ども)の生活時間だけが扱われており、自分がどんな生活をしてい

るのかを振り返り、生活習慣の見直しというところが授業の目標となりやすい。しかし、大人の生活時間も取り入れることで、生活時間データから性差の違いがより明確となり、また、漠然としかイメージできない自分が大人になった時の「将来」が少し見えてくるだろう。

また、教科書で扱われているような生活時間の授業実践では、自分の生活を振り返る中で児童個人の生活の改善点を見つけることはできるが、それは、個々のライフスタイルの違いにより起こる生活課題は異なるものとして捉えられ、個人の問題として処理されやすく、学級全体で共有される話し合いに発展しにくい。本研究では、ESD 実践として人権やジェンダーの課題に焦点をあて、持続可能な社会について考えさせるための授業構成と教材の工夫を行った。その結果、生活の問題点についてその理由を個人の問題にとどまらず社会の問題と結び付けて考えるように展開したため、個人的生活課題だけでなく友達的生活とも比較し、その理由を考えようとしていた。より多面的な視点で生活をとらえるだけでなく、生活と社会とのかわりについても児童の生活時間を扱った第1次でも大人の生活時間を扱った第2次でも考えていた。ESD 実践としての生活時間学習として展開することにより、児童は、今と近い将来である中学生の自分、そして大人になった時の自分のそれぞれの生活を見通し、自分がどのような暮らしをしたいかを考えることは、どのような社会を築いていきたいのかを考えることにつながることに気がついたと言える。

本授業実践の残された課題としては、児童と大人、両方の生活時間データを扱うのは、時間的な困難さがあることである。今回の実践に際して、教材を工夫して、記入する用紙にロール付箋紙を活用することで、生活時間データの収集にかかる時間を大幅に時短することができた。しかしながら、今後タブレットなどのデジタル教材の開発により、さらに効果的な授業展開が可能となると思われる。

さらにジェンダー平等についての授業をする前提として、議論の場づくりが大切である。今回は男子の意見が場を占めてしまう傾向があり、女子は感想では多様な意見を述べているものの上手く発言できておらず、意見を共有し議論するというところにまでになっ

ていなかったことが課題として挙げられるため、授業における雰囲気作りなどの学級経営の改善も望まれる。

## 引用文献

- Ito, Y., Nakayama, S., Iwata, M. (2012). PIP-Model for Pre-service Teachers in the Practices of ESD, *International Journal of Home Economics*, 5(2), 178-190.
- 伊藤葉子, 中山節子. (2014). 教員養成における ESD 指導向上のための教材開発: 小学校家庭科の授業づくり, *千葉大学教育学部研究紀要*, 第62号, 177-182.
- Ito, Y., Nakayama, S. (2014). Education for Sustainable Development to Nurture Sensibility and Creativity, *International of Development Education and Global Learning*, 6(2).
- 小野恭子. (2009). 「生活時間調査記録」を扱った小学校家庭科での児童の気づき, *東京学芸大学附属学校研究紀要*, 第36集, 65-73.
- 小野恭子. (2010). 生活時間データの違いによる児童の学び『東京学芸大学附属学校研究紀要』37, 89-99.
- 大竹美登利. (1998). 「教育実践報告にみる『生活時間』教材の授業展開とその方向性」『東京学芸大学紀要 第6部門: 技術・家政・環境教育』50, 69-75.
- 尾島恭子, 大浦美雪, 分校淑子, 綿引伴子. (2004). 持続可能な社会に向けての消費者教育の転換 (第1報): 研究の枠組みと授業内容の検討, *金沢大学教育学部紀要*, *教育科学編*53, 117-121.
- Nakayama, S., Ono, K., Otake, M. (2006). Time-Use Data and Japanese Elementary School Students' Learning of Gender Differences, *日本家庭科教育学会誌*, 49(3), 171-180, 2006.
- 中山節子. (2014). 時間貧困からの脱却にむけたタイムユースリテラシー教育, 大空社.
- 綿引伴子, 分校淑子, 大浦美雪, 尾島恭子. (2004). 持続可能な社会に向けての消費者教育の転換 (第2報): 中学校・高等学校の授業案と中学校の授業評価, *金沢大学教育学部紀要*, *教育科学編*53, pp123-131.
- 綿引伴子, 分校淑子, 尾島恭子, 大浦美雪. (2004). 持続可能な社会に向けての消費者教育の転換 (第3報): 高等学校の授業評価, *金沢大学教育学部紀要*, *教育科学編*53, pp133-139.
- 文部科学省. (2008). 小学校学習指導要領解説家庭編, 東洋館出版社.
- 文部科学省 (2015). 教育課程企画特別部会論点整理 [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingitouchin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingitouchin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf).

(2016. 8. 8 受理)